



## 私の歩いた道

森 清

大正10年に大阪の堺中学3年生のときに、物理の先生から宇宙の構造について極めて明快な解説をしていただき初めて星座について知りました。その後、夜間教練で徹夜の歩哨に立ったとき、北斗七星が1晩の間に北極星のまわりに大回転するという壮観を見て大いに感激しました。それが動機となって高校を経て東大の天文学科へ入学したのは震災後の大正14年でした。高校の物理の先生は天文への進学をすすめられませんでした。趣味としてやった方がよかろうと申されましたが、私にはその真意が了解できなかったのでせう。しゃにむに進学したわけです。1年生の定員5人が入学しましたが2年に進級したときは2名で、1つの机の向う側に天文学の大先生がノートを拵けて講義され、われわれ2名はひたすら筆記するばかりで、対話などは1回もありませんでした。卒業論文の指導教授は平山清次先生で、先生は小惑星研究の第1人者で、族という名称で呼ばれる

群を発見されたため、外国のどんな天文教科書にもお名前が出ています。先生の下で小惑星の統計的研究をして、昭和4年に、君の前途は多難であろうという別れの言葉に送られて卒業しました。在学中に感じたことですが東京帝国大学という名称の示すように、学生も国費で養成せられているので、お国のために役に立たなければならぬという考えが各人の心の中に植え付けられていたようです。殊に自然科学関係の研究者にはその気持ちは強よかったようです。私の如き小者でさえも何かやらねばならぬとは思っていました。ですから天文測量などは重要科目でした。さて何を研究するかということですが、当時は研究発表が印刷されることは極めて困難でした。

小惑星というのは、天王星の発見後20年して1801年にイタリーで発見されたのが第1号で、以後その数を増し現在では1860個に達しましたが、火星と木星との間に推定数万個が散在するといわれる小型の惑星です。毎年新小惑星が発見されますが、それが確定されるまでには数年間にわたる観測と推測計算の結果とが十分に一致する必要があります。観測は激増したのですが計算が追い付かないということをドイツの中央計算局が呼びかけていました。軌道要素の計算というのですが、その結果は印刷になって発表されます。私は計算に興味がありましたので、それを始めました。昭和49年2月までに新小惑星と彗星の軌道要素など総計440個を計算し、国内で発表しましたが、その大部分はシンシナチ天文台発行の小惑星回報に再録されています。私の計算は数表とそろばんだけで行ないますので、近頃の若い仲間から好奇の目で見られています。彼等は機械でやっています。しかし私のやっている程度の計算ならば機械に負けません。そのうち大型の計算機が導入されるそうですから、私の手計算もぼつぼつ終りに近いでせう。才能不足の私には論文形式のものなどできませんので、時間と精力による計算にかけているのです。戦後10年間、夜間高校に勤めましたが、昼間に充分時間がありますので好都合でした。夜間高校を嫌う人が多いのですが、何か研究するのには有難い学校です。そうして研究している仲間を数人知っています。

終りに小惑星がどのようにして生まれたかということは、太陽系の成因を解明する手がかりとなるわけです。いろいろな仮説が出ていますが、まだまだ未知の分野です。私が天文学に飛込んだのは矢張り運命の指示によるのかと、今では考えています。

退職の第1年の若葉かな

(原文のまま)

## 森 清 先 生 略 歴

明治39年1月4日生まれ

昭和4年3月31日 東京帝国大学理学部天文学科卒業

昭和41年4月 中京大学教養部講師を嘱託される

昭和43年4月 中京大学助教授

昭和49年4月 中京大学教授

昭和51年3月 中京大学停年退職